玉砕の島「クエゼリン環礁」の今

クエゼリン島

▲日本軍の指揮所か監視哨と思われる。平坦な珊瑚礁の島では施設を隠蔽できない。クエゼリンの防備はタラワに比べ薄弱で、海岸の障害物はほとんどなかった。敵の上陸に備え、急遽海岸に対戦車壕等の陣地を構築したが、完成に至らないまま米軍の空襲が開始された。

▶米軍のラボには武器弾薬、装備品以外に、お守り、寄せ書きの日の丸、酒瓶、カルピスの瓶、食器、便器まで、ここに生きていた日本人の痕跡が多くあった。遺族はここに並ぶ遺品の中に戦没者の名前を探していた。

◀上空から見た環礁。青く美しい海面に、鮮やかなエメラルドグリーンと白い珊瑚礁のコントラストが映える。マーシャル諸島は1914年から終戦までの約30年間、日本の委任統治領。欧米の植民地政策と違い、島の習俗や信仰を重んじ、公衆衛生やインフラ整備などの善政を敷いた。1986年に米国と自由連合協定を結び、独立した。

▲島には海からの強い風が、絶えず吹き付けている。環礁内の島は平坦で海抜は2mしかなく、最高地点でも6m。四季はなく、年間を通じて27～28℃。全島、美しい芝生が広がっている。この島には米軍関係者とその家族だけが住んでいる。

▶島内の教会。美しいステンドグラスは上陸戦で戦死した米軍兵士をモチーフに、彼らの愛国心を称えていた。米軍兵士は称えられ、一方、孤立無援で戦った日本の兵士は芝生で蓋をされ、七十数年、この地中に眠ったまま。魂はまだここにあるのだろうか？

▶昭和43年に遺族会により建立された慰霊碑。ほかの戦地と違い、マーシャルへの入国は厳しく制限されているため、遺族会は何年も根気強く米軍と交渉し、建立が実現した。以来、慰霊碑は米軍によりキレイに管理されている。

カメラ＆ペン　鈴木千春

（本文108ページ参照）

◀狭い区画（部屋）に区切られていた建物。ガイドは捕虜収容所と説明したが、事実確認はできていない。連日の爆撃により建物は徹底的に破壊された。また、マキン、タラワ戦の教訓で、米軍が開発した上陸用舟艇や火炎放射器での犠牲も多かった。

◀武器庫か弾薬庫。（本文P109写真と同じ建物）。現在は、分厚い扉はないが、コンクリート壁の凹みはそのまま残っている。クエゼリン全体で捕虜となった者は264名。ほとんどが朝鮮人設営労務者であった。

◀米軍が建てたルオットの慰霊碑。クエゼリン同様、手入れされた芝生に白柵、慰霊碑の上には立派な赤い鳥居が立てられている。銘板には菊の御紋章と、「ロイナムル防衛のために生命を捧げた日本軍将兵ここに眠る」の言葉。

ルオット島

▲ほぼ原形をとどめる12.7糎高角砲が空を睨む。クエゼリンからルオットまではチャーター機で20分の距離がある。ルオット（ロイ）島とナムル島は環礁北部にある双子島。ルオットは全島が飛行場、ナムルには兵舎や施設が整然と並んでいた。ここで約2500名が戦死している。

◀厚さ30センチを越える頑丈なコンクリートの弾薬庫。ルオットは航空の中心基地として司令部があり、約2900名が守備についていたが、戦闘兵力としては貧弱な状態であった。十分な築城も、水際障害物や戦車障害物もわずかしかできていなかった。

▶かまぼこ形の海軍防空壕。昭和18年、最前線の護りとして各島に次々と兵力が増強された。陸・海ともに士気は旺盛。夜になると「気合い入れ」がはじまり、陸軍は点呼と称して「ビンタ」、海軍は整列と称して「精神バット」の音が響いていたという。

クエゼリン&ルオット訪問記

●戦死した大叔父の慰霊のため、日本から遙か四六〇〇キロ離れた激戦の島マーシャル諸島クエゼリン環礁を訪れた！

鈴木 千春

各駅停車のフライトで二日

日本から約四六〇〇キロの彼方、広大な海域に二九の環礁と約一二〇〇の島からなるマーシャル諸島がある。その中でもクエゼリン環礁は世界最大。主要島のクエゼリン本島は米軍ミサイル基地のため許可なき者は入れない。大陸間弾道ミサイルの迎撃実験場で、周辺には水爆実験のビキニ環礁がある。

私はマーシャル方面遺族会の現地慰霊に参加した。海軍第六四警備隊としてウオッゼ島（クエゼリンの隣の環礁）で戦没した大叔父の慰霊のためである。大叔父は二五歳だった。同行の十数名の遺族のほとんどはクエゼリン、ルオットで戦没された将兵の遺児である。

とにかく遠い。何もかも時間がかかる。入国申請から許可まで半年を要する。軍事施設だけに、外交ルートで書類が回る。厚生労働省→外務省→米国防総省→クエゼリン基地司令部へ。許可が出ればその逆をたどり書類が戻る。

日本から二日かかる。成田～グアムで一泊。グアムからユナイテッド航空のアイランドホッピング便でチューク～ポンペイ～コスラエと各駅停車フライト。便数が少ないため満席、各島で給油、荷物の積み下ろしを繰り返す。

グアム出発から九時間、夕刻にクエゼリンに到着。降りるのは軍関係者のみ。乗客は機内で待機し次の空港、首都マジュロ、終着地ホノルルに向かう。許可証を持つ私たちだけがタラップを降りるとムッとする外気。高くそびえる椰子の木が出迎えてくれた。

米軍の施設・ロッジ以外に宿泊場所はない。買い物は基地の売店で。酒、タバコは買えない。ミサイル基地ゆえに島内には巨大アンテナが多数あるが、撮影は許されない。

島には常に、強い海風が吹き、時おりスコールが通り抜ける。外海は五色のグラデーション。水平線から、紺碧、群青、青、緑、白。波は高く潮騒が響く。こんなに外海は荒いのか、泳いでも日本に帰りたかっただろうな、と孤島で散った大叔父を想った。

今も五〇〇〇名が眠る

マキン、タラワ陥落後の昭和一九年、米軍上陸の矛先は大叔父のいるウオッゼ島だったが、強固な戦車防壁があるためクエゼリンに変更された。島が変形するほど大量の爆弾が投下され、艦砲射撃も加わった。以前、戦闘直後の写真を見たことがある。椰子の木は爆風でなぎ倒され、島は黒煙を上げ、穴だらけ。瓦礫の中に日本軍将兵の遺体が散乱していた。

クエゼリンは初めて米軍に占領された日本の領土（信託統治領）である。

現在のクエゼリンは、激戦が幻だったかのように美しい。米軍によって整備され、芝生に覆われゴルフ場のようだ。しかしこの下には約五〇〇〇名の将兵が眠っている。壮絶な戦闘で力尽き、倒れた姿のまま。私たちは今、彼らを踏んでいる、と思ったとたんに胸が苦しくなった。

島には二つ慰霊碑がある。一つは昭和四三年に米国の許可を得て、遺族会がクエゼリン本島に建てたもの。もう一つが環礁北部のルオット島に、日本兵のため米軍が建てたもの。私たちはこの二つの慰霊碑に祈りを捧げるためにやってきた。現地の米軍司令官と数名の幹部も一緒に祈ってくれた。

慰霊祭のあと、島内に残る戦闘の傷跡をバスで回った。米軍は島を破壊し尽くした。空爆と艦砲射撃、影も形もなくなって人間が蒸発するほどの爆撃だったという。遺児の一人は廃墟を見て涙ぐんだ。私も当時に思いを馳せた。大叔父の戦没地は隣の環礁ではあるが、生きた環境は同じ。抵抗のすべなく、どれほど無念だったことか。

現在、米軍は日本軍の戦争遺構に番号と説明板をつけ、維持管理している。グアム、サイパンのように観光地化され、心ない観光客にいたずらや落書きをされて無残な姿になっている戦跡とは、一線を画していた。敵軍の遺構を維持管理し、慰霊碑まで建てるという米軍の態度に感心した。それは逆に、この地に眠る将兵の奮闘がいかに「敵ながらあっぱれ」と思わせる戦いぶりだったのかを物語る。

一機一艦の来援もない中、兵士は夜襲を繰り返した。対戦

●モノクロ・グラビア参照

車爆薬をもって戦車に体当たりし、最後の一兵まで戦った。将校は軍刀を振るって壮烈な戦死を遂げたという。

米軍は次にエニウエトク環礁に侵攻。日本軍は空爆で大損害を受けながらも、最後のバンザイ突撃を敢行し全滅した。

私たちは島内の研究施設（通称「ラボ」）を見学した。ラボは基地の整備や拡張工事の際に発掘される遺骨や遺品を調査・分析する。文化人類学者が常駐し、米国人の人骨であれば、マーシャル政府の許可を得て本国に送還し、無名戦士墓地に埋葬する。米国人以外はラボに保管していると言われている。遠路、遺族が慰霊に来ても遺骨や遺品は「おあずけ」状態。せめて遺骨と日の丸は返して欲しいと思った。

日米はいまや同盟国同士。国は遺骨返還の交渉を即刻進めて欲しいと願う。

ルオット島。破壊された弾薬庫の扉前に座りこむ日本兵と米兵

飢餓の島ウオッゼ

当初、日本海軍にとって珊瑚礁は未知の戦場。地積は狭く、海抜二メートルと平坦で、穴を掘ると海水が出て防備施設の構築は極めて困難。施設を掩蔽できず露出したまま。これら防備上の致命的欠陥からマーシャル諸島の戦術的価値には多くの異論があったが、敵国との国境最前線。中部太平洋方面の哨戒や潜水艦作戦の拠点とするため、海軍は開戦前からクエゼリンに第六根拠地隊司令部を置き、航空基地を多数建設し、重要な防禦線とした。艦隊泊地もあり、環礁は距離的にも敵の偵察機が届かない好位置にあった。

ある海軍将校の回想録※に「ミッドウエイ海戦一ヶ月前、第六艦隊の潜水艦がクエゼリン環礁内に停泊し備えていた。特務艦艇も集合して環礁内は誠に賑やかだった。しかし通信情報で刻々と海戦の悲報が伝わり、一同がっかりして心配していた。海戦後は敵潜水艦が活発に出没し、輸送船の被害が急増。昭和一八年から防備強化をはじめたが、船舶の不足、敵の攻撃で鋼材、セメントの輸送ができず、防備施設を満足に構築できなかった」とある。

食糧、弾薬の備蓄基地クエゼリンが玉砕した。「飛び石」作戦で米軍が上陸せず、素通りされた島々には「別の地獄」が待っていた。終戦まで約二年にわたる飢餓である。

執拗な爆撃で航空機も艦船も喪失、補給路も脱出路もなく籠城戦を強いられた。水は雨水のみ。島は農耕に適さず、日本から肥沃な土を運び込み野菜畑を作っていたが、米軍は畑ごと吹き飛ばした。餓死させ自然消滅させる陰湿な作戦。兵士は飢えとの戦いになった。

遺族会に提供されたウオッゼ島の元海軍主計兵の手記に生々しい描写がある。「戦闘配食は主食、米一日七二〇グラムだったが、二八〇グラムに減量され最後には『おちょこ一杯』に。島内には木に寄りかかった餓死者、食糧窃盗の罪で木に縛られた遺体、銃を持って伏せたままの遺体、滑走路の下の遺体は白骨化していた」と、遺族には辛い記述だった。

敵中に孤立し、飢えと砲撃に耐えながらも島の各砲台は果敢に応戦。だが戦死傷者は増加の一途。「世界最高の訓練を受けた陸戦隊もこの物量攻撃にはどうにもならん」とのウオッゼ島司令、吉見大佐の言葉が残っている。施設がむきだしのため敵の爆撃は正確で、兵舎、食糧庫すべて直撃され、先の主計兵は「昭和一八年一一月九日以降、食糧すべて爆撃によりゼロとなる。しかしトラック島の第四根拠地隊からは『滑走路を至急修理せよ』の電文が届くのみ。食なくして戦えるか！」と憤慨している。

絶望的な状況でウオッゼ島の兵は、雑草、毒のある魚、ネズミも食べ尽くし、デング熱、アメーバ赤痢、逃亡、投降、餓死者続出の地獄を彷徨った。主計兵は手記の最後にこう訴える。「若い勇士が國に命を捧げた、少しは現代人も考えろ！　現代の社会は甘えと堕落だ！」

マーシャル諸島の戦闘は玉砕か餓死。大叔父は飢餓の中、拳銃自殺をしていた。

復員輸送の「氷川丸」が第一便で救助に向かったのは、飢餓で瀕死のマーシャル諸島だった。

昨年「戦没者の遺骨収集の推進に関する法律」が成立した。これが最後の機会。私は孤島に眠る大叔父を迎えに行きたいと切望している。ウオッゼ島・第六四警備隊の戦時中の「遺体埋葬地」情報をお持ちの方、是非ともご連絡をいただきたい。

※『クエゼリン島の今と昔』（クエゼリン島戦没者遺族会）

平成29年9月1日発行　昭和23年4月24日第三種郵便物認可　第70巻第9号　通巻857号　毎月1回1日発行

丸 [MARU]

駆逐艦「雪風」

特集 伝説の強運艦

2017 9 月号

カラー＆モノクロ

米民間アグレッサー飛行隊
POF創立60周年エアショー
F-35A国産初号機初飛行
東海＆キ102乙

長編戦記 飛龍艦攻隊ミッドウェー戦記

ワイドイラスト わかりやすい「船舶用エンジン」の基礎

最新軍事情報

北朝鮮ミサイル開発ラッシュの舞台裏